

Working Paper Series in
Study of “Knowledge Diplomacy” and
Internationalization of Higher Education Project

**The Regional Disparity on Students’ Career Path and
Future Perspective in Cambodia:
Interviews with Students, Teachers, and Guardians**

Eri Nakamura, Akiko Harada, Emi Okabe, Rei Morita, Yiping
Zhang, Haruna Ishimaru, Mio Kondo and Kenji Kitamura

July, 2017

No. 1

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター
Center for Advanced School Education and Evidence-based Research
Graduate School of Education
The University of Tokyo

カンボジアにおける生徒の進路希望と将来観の地域格差

—生徒・教員・保護者へのインタビュー—

中村 絵里, 原田 亜紀子, 岡部 瑛美, 森田 怜, 張 一屏 (東京大学)

石丸 晴菜 (University of Bristol)

近藤 美桜 (上智大学)

北村 健二 (筑波大学)

The Regional Disparity on Students’ Career Path and Future Perspective in Cambodia: Interviews with Students, Teachers, and Guardians

Eri Nakamura, Akiko Harada, Emi Okabe, Rei Morita, Yiping Zhang (The University of Tokyo)

Haruna Ishimaru (University of Bristol)

Mio Kondo (Sophia University)

Kenji Kitamura (University of Tsukuba)

Authors’ Note

Eri Nakamura is a PhD student, Graduate School of Education, University of Tokyo.

Akiko Harada is a PhD student, Graduate School of Education, University of Tokyo.

Emi Okabe is a Master student, Graduate School of Education, University of Tokyo.

Rei Morita is a Bachelor student, Faculty of Education, University of Tokyo.

Yiping Zhang is a Bachelor student, Faculty of Education, University of Tokyo.

Haruna Ishimaru is a Master student, Graduate School of Education, University of Bristol.

Mio Kondo is a Bachelor student, Faculty of Foreign Language Studies, Sophia University.

Kenji Kitamura is a Bachelor student, Faculty of Education, University of Tsukuba.

This working paper is supported by the Grants-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI), Kiban A, No. 15H02623 (Study of “Knowledge Diplomacy” and Internationalization of Higher Education in Asia Project).

Abstract

The purpose of this research is to clarify the similarities and differences of Cambodian primary and lower secondary school students’ perspective about their future, such as their ideal career path and expectations toward the job, among the urban, rural and remote area through interviews with the students, teachers, and the parents. The interview was conducted in six different schools: one primary school and one lower secondary school in each of the urban, rural, and remote area in Siem Reap, Cambodia. As the result of the research, the students in remote area had lower expectations about the job and higher education, while in the urban area, the students aimed for higher education and the jobs they sought were more diverse. This tendency was visible in the parents’ perspective as well, while teachers, regardless of the area, wished the students to pursue higher education, teachers in remote area acknowledged the importance of education and had a strong desire for students to become a person who will contribute to the community. However, there were few cases in rural and remote area where a student hopes to pursue their education by receiving support from the school, leading to a conclusion that it is not fair to say that the students’ career decision are disclosed in the rural and remote area than that of urban area.

Keywords: Regional disparity, students’ career, urban, rural, Cambodia

カンボジアにおける生徒の進路希望と将来観の地域格差

—生徒・教員・保護者へのインタビュー—

1. はじめに

1.1 カンボジアにおける教育の状況

カンボジア王国 (Kingdom of Cambodia ; 以下, カンボジアと記す) の初等教育は, 総就学率が 111.2%, 純就学率が 94.5%と普及度が高い (MoEYS, 2015)。しかし, 初等教育修了率は 84.1%, 前期中等教育への進学率が 76.2%, 後期中等教育への進学率が 71.1%と低くなっており, 初等教育の内部効率性や小中・中高接続に課題があることが考えられる (MoEYS, 2015)。また前期中等教育は総就学率が 53.3%, 修了率が 40.3%と普及度が低く, 中途退学率は約 20%と高くなっている (MoEYS, 2015)。このことから, 初等教育に比べて中等教育などの高次の教育段階へのアクセスはかなり限られたものであることがわかる。

より詳細に見ると, 小学校 1 年生での留年率が 10%, 中途退学率が 6.3%となっており, 小学校 1 年生のうち 2 割近くは進級できていない状況である (MoEYS, 2015)。第一学年には就学適正年齢人口の約 1.3 倍の子どもたちが就学しているため, 教室や教員, 教材などの不足が懸念される。また, 就学前教育の普及度が低く就学準備 (school readiness) が不十分なまま入学する子どもや, 適正年齢以下で入学する子どもが多いことも第一学年での留年・退学率が高い原因であると考えられる。

10 数年前までは第一学年の進級率はさらに低く, この原因は全学年において行われる進級テストだと考えられていた。野村(2004)は当時, カンボジアの教育が依然として旧宗主国であるフランスの落第制のある教育システムであり,

5 割の子どもがこの進級テストに落ちて進級が阻まれていたことを指摘している。しかし, 清水・外山・松井(2007)によると現在は進級テストが廃止されており, 中間・期末テストの結果で進級の可否が決められるため, 大多数の子どもは 6 年生まで進級できるようだ。

進級テストが廃止されて以降進級率が改善されたものの, 未だに小学校 1 年生の 2 割近くの子どものは留年や退学をしていることは看過できない。また, 進級率向上の要因が進級テストの廃止だけだとすると, 従来は学力が低く進学することができなかった子どもが進級しても授業についていけず, クラス内で学力差が生じるといった問題も考えられる。

また質の問題と同様にカンボジアの教育で問題視されているのは, 平等性の問題である。統計上男女間での不平等はあまり見られないが, 地域間では不平等が存在する。農業や漁業を生業とする家庭が多い農村部では, 教育のアクセスや質において都市部に劣る場合が多い。具体的には, 農村部の初等教育の総就学率は 115.2%と, 都市部に比べて 20%以上高いが, 教育段階が上がるにつれてその就学率は都市部よりも低くなる傾向があり, 農村部の後期中等教育の総就学率は 19.9%と, 都市部の半分以下になっている (MoEYS, 2015)。

以上のように, カンボジアでは国際的な教育開発の潮流に沿って基礎教育の普及が進んだが, 依然として学力などの質の問題や地域間の平等性には大きな課題が残っている。また, 特に教育の到達段階には農村部と都市部で大きな地域差があることが統計から指摘される。

1.2 先行研究の問題点と本研究の目的

本稿では、教育の問題が多岐に渡るカンボジアの学校教育の中で特に基礎教育について取り上げる。基礎教育に焦点をあてる理由は主に2つある。第一に、6歳から15歳前後の若者に良質な教育を保証することは、国家の、そして国際社会の責任であるためであり、第二に、基礎教育の量と質を共に充実させることは、高等教育まで続く学校教育制度の入り口を整備することを意味する(正楽, 2008)からである。

カンボジアの学校教育の量的拡大に関する研究はいくつか見られるのに対して、質的充実に焦点を当てた研究は極めて少ない。その理由としてまず、教育の質的充実に指標化することが困難であり、また、何をもちて質の向上とするかも論者によって様々であることが考えられる。次にカンボジアを始め多くの途上国では、基礎教育段階の子どもの未就学と不就学の課題が未だ大きく、質的充実にまで十分に手が回らないことも事実である(正楽, 2008)。実際、カンボジアでは近代化のプロセスにおける重要な要素として、教育システムの拡大を図った。具体的には国際的評価を高めるために、教育の質的向上よりも量的拡大を重視し、高等教育の量的拡大を急速に進めていった(Pit and Ford [2004=2006])。その結果、カンボジアの労働市場と、教育を受けた労働者のニーズとのずれが生じていることがわかった。

本研究ではカンボジアの教育の質に着目するために、基礎教育分野において、生徒・教員・保護者にインタビューを行うこととする。質的向上の一つの課題とされているのが、初等学校から中等学校への移行率の低さである。これまでの研究でも、中等学校からさらに上級学校への移行率の低さや中等学校の保持率及び終了率

の低さの原因となり得る要因に、通学距離の近さ、学校のインフラストラクチャ、教師のパフォーマンス、諸費用、生徒の成績、両親が受けた教育レベル、生徒の自信、学校での生徒間の関係などが挙げられている(Edwards Jr. et al., 2014)。この中の「諸費用」には、学費などの直接費用以外にも補習のためのプライベート指導を受ける費用が含まれ、これは貧困家庭の家計費に過重の出費となっている。多くの生徒はこの特別指導を受けていないため、学業成績に影響を与え、ひいては上級学年に進級するかどうかの決定に影響を与える(Brehm and Silova, 2014)。また、Edwards Jr. et al. (2014)は、カンボジアにおいて生徒が進学する過程で、特に家庭レベルで生徒の移行と早期退学に影響を及ぼす要因について直接調査した研究はほとんどないことを指摘している。本研究では、生徒の進級に影響を与える一要因となっている補習にも焦点を当て、保護者の希望や教員による補習授業の無償提供など教育機会提供の努力が、生徒の学習意欲や将来の希望にどのように影響しているか検証する。

さらに教育の質的向上には、いくつか重要なアクターが関わる。学校内では教員と生徒、学校外では保護者と地域コミュニティが挙げられる。多くの先行研究が言及しているとおり、学校教育の質的向上には質の伴った教授、つまりは教員の質的向上が不可欠である。OECDによる *Teachers Matter: Attracting, Developing and Retaining Effective Teachers* では教員とその指導が生徒の学習に最大の影響を与えるということが再認識され、教員の質的向上と生徒の学習達成度に正の相関があることが確認されている。加えて保護者や地域社会、非政府組織などの学校外部のアクターが学校への関わりを 7

段階に分けて提示している(Shaeffer, 1994)。その中で保護者が資材の提供以外には、学校への参加・学校行事などの関与がないこと、家庭内で宿題などの面倒や子どもに学習の動機付けを行うこと、そして学校での会合や集会への「聴衆」として関与することの3点について、実際の状況をインタビューで確認する。

カンボジアは2015年までの基礎教育完全普及を国家の教育目標としている。平山(2008)は、カンボジアの基礎教育拡充に向けた課題として、国内の地域間格差の緩和、特に農村部と遠隔地における初等教育から前期中等教育への移行期にいる子どもの教育環境の整備を指摘する。学校数や就学者数の地域間格差は、初等教育段階まではさほど見られないが、教員は都市部の学校に集中しており、地方では慢性的な教員不足に悩んでいる。中等教育段階では初等教育以上に都市と地方の格差が大きくなり、提供される教育の質にも大きな違いが生まれる(平山, 2008)。したがって本稿では、都市部・農村部・遠隔部の3つの地域を取り上げ、地域による相違を明らかにしたい。

以上の先行研究の特徴をふまえて本稿では、カンボジアの基礎教育(初等教育, 前期中等教育)に焦点を当て、生徒の進学希望や職業への期待といった将来観について地域ごとの共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の概要

本研究は、2016年2月29日(月)から3月3日(木)までの4日間、カンボジアのシェムリアップ州において実施したインタビュー調査のデータを分析したものである。

2.1 調査地の概要

インタビュー調査は、シェムリアップ州の州都(都市部)及び近郊、遠隔地(農村部)の3地域において実施し、それぞれの地域で、小学校1校、中学校1校を訪問した。4日間で、小学校3校と中学校3校を訪問し、校長5人、副校長1人、教員12人、小学校高学年児童38人、中学生34人、小学生の保護者18人、中学生の保護者16人にインタビューを行った。小中学生については、各校に予め依頼のうえ、成績上位・中位・下位の3層からそれぞれ同数の生徒を選出した。教員と保護者についても、各校に選出を依頼していることから、インタビュー対象は選択バイアスのある標本であるといえる。

本研究の調査地である州都シェムリアップは、世界遺産のアンコール・ワットをはじめとするアンコール遺跡群を有しており、東南アジアでも有数の観光地として知られている。同州の特徴として、都市部では観光業を中心とした第3次産業の労働人口が多いことが指摘できる。2014年のカンボジアの全就業者(15-65歳)825万1千人に対する都市部と農村部の職業別統計(首都プノンベンを除く)によれば、都市部ではサービスおよび販売業29.8%、工芸品関連業22.4%、農業・林業・漁業13.7%に対して、農村部ではサービスおよび販売業10.6%、工芸品関連業18.9%、農業・林業・漁業47.5%となっている(Ministry of Planning, 2015)。実際にシェムリアップ州でインタビューした結果からも、都市部では観光関連産業に従事する親や兄弟が多い一方で、農村部ではほとんどが農業や漁業、そして小規模な個人商店といった回答が多く得られている。

2.2 インタビュー概要

インタビューは、4つのグループに分かれて実施した。インタビュー対象者1人に対して、インタビュアーは2人もしくは3人の日本の大学生・大学院生で、英語・クメール語の通訳として王立ブノンペン大学の大学院生1人が各グループに入った。複数のグループでインタビュー

を実施するにあたり、一定数以上の項目の回答を比較分析できるように共通化する必要があった一方で、グループごとの関心テーマに合わせて内容をある程度深耕できる余地を残すため、半構造化インタビューの手法を採用した。インタビュー項目のカテゴリーは、表1に示すとおりである。

表1 インタビュー項目のカテゴリー

対象 カテゴリー	校長・副校長・教員	生徒（小学校高学年児童 ・中学生）	保護者
1. 属性	氏名, 年齢, 性別, 出身地, 最終学歴, 教員歴, 指導学校数, 担当教科, 月収, 副業の有無	氏名, 年齢, 性別, 学年, 出身地, 就学前教育の有無, 学校の成績, 留年有無, 遅刻・欠席の頻度, 補習授業への出席有無	氏名, 年齢, 性別, 最終学歴, 出身地, 夫婦の職業と月収
2. 家族構成	—	両親の職業, 兄弟姉妹の年齢, 学年, 職業	同居する家族構成, 子どもの年齢・学年・就学前教育の有無・学校の成績・職業
3. 学校観, 教員観, カリキュラム	教員になった動機, 教えることが楽しいか, 1日の仕事の流れ, 学校の仕事を家に持ち帰るか, 就学前教育を受けた生徒と受けていない生徒の違い, 指導する教科・カリキュラム・教材に満足しているか, 教えることの難しさ, 生徒にとって最も重要な教科	学校が楽しいか, 好きな先生・嫌い(苦手)な先生がいるか, 先生の教え方がわかりやすいか, 好きな教科・嫌いな教科, どの教科が重要か	学校に来る頻度, 先生と話をすることがあるか, 子どもが学校で何か問題がある時先生に相談するか
4. 将来観	生徒には将来どのようになって欲しいか	どの教育段階まで進学したいか, 将来の夢	子どもにどの教育段階まで進学して欲しいか, 子どもに何の職業に就いて欲しいか
5. 家庭役割	—	手伝いの頻度と内容, 仕事をしているか	家庭の学習環境, 子どもと学校での出来事を話すか, 教育について話すか, 子どもの勉強を手伝うか

2.3 データの記録および分析方法

インタビューで得られたデータは、地域、学校、対象（教員、生徒、保護者）別に分類して集約した。その後、全インタビューで、集約したデータを比較検討しながら地域ごとの特徴や傾向について検討し、そのなかから複数のインタビュー対象者を主要な事例として抽出した。本稿では「生徒の家事労働と遅刻・欠席理由との関係」、「補習授業の特徴」、「生徒・保護者・教員の将来観」の3点に着目して分析を行った。

3. 生徒の家事労働と遅刻・欠席理由との関係

インタビュー項目5の「家庭役割」（表1）に関して、家庭での手伝いについては、教育段階や地域に関わらず、行っていると回答した生徒がほとんどであったが、その内容や頻度は地域によって差異があり、農村部では家庭での手伝いが欠席や遅刻の原因となっているケースが見られた。また農村部では別の農家で働いて収入を得ていると回答した生徒も数人おり、都市部に比べて家計を支える役割が子どもにも求められている印象を受けた。このような地域差がある一方、農村部の保護者の中にも子どもが家庭で学習できるような環境を提供しているケースもあり、家庭での学習を促進する姿勢のある保護者の存在は都市部に限られたものではなかった。

手伝いの内容については、料理や掃除、洗濯など、一般的な家事の回答はどの地域でも多く、保護者の仕事を手伝っている生徒も多かった。都市部では、仕立屋の保護者を手伝って裁縫をしたり、食品の販売を行う保護者を手伝い、商品を作ったり売ったりする仕事をしている、という回答が見られた。農村部では、保護者のほとんどが第一次産業に従事していることから、

水やりや水汲み、牛の世話など、農業を手伝っているという回答が多くの子供から得られた。

一方、手伝いの頻度や生徒の学業への影響は地域によって異なっていた。都市部では、手伝いをするのは勉強に余裕がある時、暇な時、また毎日といっても内容は所謂家事にとどまったが、農村部では、半数以上が毎日家事や農業を手伝っていると回答した。そして遅刻や欠席についての回答を見てみると、農村部では遅刻・欠席の理由として農業の手伝いが多く挙げられ、その頻度も週に数日という回答もあった。都市部の生徒の遅刻・欠席は、多くが一時的な病気や家庭の用事、寝坊といった理由からであり、何か一つの原因によって定期的、長期的に学校に行けないという状況は見られなかった。また農村部では他の農家で収穫等の農作業を手伝い、その報酬として作物や金銭的な収入を得ていると回答した生徒もおり、都市部で時々家事を手伝っているような例と比べると、一家が生業としている農作業の手伝いを毎日行っている生徒がいたり、収入や食物を得るために働いている生徒がいたり、生徒が家計を支える役割をも担っていることがわかった。

このように家庭での手伝いやそれに起因する遅刻・欠席、留年に着目すると、農村部では生徒が学習に充てられる時間が家事労働により制限されていることがわかる。しかし、農村部の全ての保護者が子どもの学習に対する優先順位を下げているわけではない。本調査では、保護者に対し家庭でどのような学習環境を提供しているかを質問し、それに関連して数人からどのように自宅で学習するよう促しているか話を聞くことができた。どの地域でも、決まった時間に勉強させるという方法をとっていたり、指導やアドバイスなどの形で家庭学習に関わってい

たりする保護者が見られた。提供できる学習資源には家庭の経済状況や保護者の学歴の違いなどから地域差が見られたが、家庭でも子どもに学習させようという姿勢は、都市部に限らず農村部の保護者にも現れていた。

4. 補習授業の特徴

カンボジアでは「午前/午後」二部交代制の学校が多く、半日の授業以外の時間を使って通学先の教員の補習もしくは外部の施設での補習を受ける生徒が複数人いた。こうした補習にあたるエクストラクラスに関する質問は、事前に作成した質問項目に入っていなかったため、2日目から一部の生徒にしか関連質問を行っておらず、インタビュー対象全体に占める受講生徒の割合は、明らかにできていない。本章では補習や塾を言及した生徒の特徴を地域、科目の2点でまとめる。

まず都市部、近郊、遠隔地の小・中学校6校の中で、初日にインタビューを行った都市部の小学校を除き、どの学校にも補習を受けている生徒がいた。都市部の小学校は「一部制のため、補習を受けていない」との回答を得たことから、補習の時間帯が昼間に限定することが推測できる。また、補習を受けている生徒の各学校における割合については、都市部と遠隔地の中学校回答者の大多数が受講していることがわかった。それぞれの成績評価（「クラスでの順位」）を分析したところ、小学校では補習を受ける生徒に、地域問わず成績が上位もしくは上がりつつある生徒がほとんどであるのに対し、中学校ではどの成績評価の生徒も補習を受けていることがわかった。ただし、成績上位の生徒が全員補習を受けているわけではなく、なかには受けていない生徒も見られた。補習を受ける理由として考

えられるのは、成績低下による留年の防止とより良い教育を受けたい意欲の2点である。カンボジアでは9年義務教育が行われ、前期中等教育の就学率と比較して後期中等教育への就学生徒数がかかなり少なくなることから、成績順位の高い生徒や教育意識の高い保護者を持つ生徒が「卒業試験」でより良い成績をとるために、補習を受けている傾向が予想できる。

次に、補習の科目として、半分以上の回答に英語が含まれている。これは、海外のNGOが主催する無料の英語教室の存在と関係すると考えられる。生徒や保護者が言及した組織にはオーストラリアのACE (Australia Centre of Education)やオランダの団体が挙げられ、ACEでは学術の英語教育や東南アジアの学生の留学支援が行われている(IDP Education HP, 2016)。他には「村人の家で無料の英語補習を受けている」との回答もあった。英語以外の科目の補習はほとんどが有料で、1回1000リエルが相場であった。小学校では英語と一部数学・国語だったが、中学校になると補習科目数が増え、英語以外には理系科目（数学、物理、化学）が多かった。その他に、クメール語の回答も見られた。

補習の科目選択の理由として、苦手科目との関連を検討するために「嫌いな科目」、「好きな科目」、「重要だと感じる科目」の3項目の回答を比較分析した。その結果、補習を受けている科目が高い確率で「嫌いな科目」に入っており、「重要だと感じる科目」との関係は見られなかった。これは「補習」を苦手科目の克服のために受講しているのか、それとも補習で受講する科目を嫌う傾向にあるのかを今後明らかにする必要がある。また、「好きな科目」と「重要だと感じる科目」の区別が不明確な回答者が多く、「好きだから重要だと思う」というロジックが

多く見られた。しかし、好きな科目と別な科目を重要だと考えた一部の回答者には、その理由まで落とし込めた生徒もいた。特に将来の夢との関係性が強く、会計士もしくは医者になりたいから数学が最も大事だと考えている生徒やクメール語の先生になりたいから国語が重要だと回答する生徒がいた。数量的にみると、重要だと感じた科目に最も多いのが数学で半数弱を占め、クメール語が回答者の約三分の一であった。これは途上国における理数科が重要視されている背景や、自国の言語が主流であること、そして先生の教え方と関連すると考えられる。

5. 生徒・保護者・教員の将来観

本章では、生徒・保護者・教員にインタビュー調査を行うなかで、それぞれ立場や年齢の異なる層が互いにどのように影響を与え合っているのかについて、生徒の将来観に着目し、考察を行う。

保護者の職業は都市部と近郊の農村部、遠隔地で主要な職種が異なる。生徒の将来の夢は身近な職業と関連しているだろうか。都市部では父親はドライバー、ガイド、警察や軍への従事、母親はレストランや商店での物品販売、お土産用の洋服の仕立屋が多く、他に軍の会計士、結婚写真館経営者、彫刻家、庭師、美容師教師など職種が多様であった。一方、近郊では主に農業、魚の販売、教員、遠隔地では両親ともに農業を営む家庭の他、父親は工場や建設、母親は主婦・家政婦のいずれかに就いている家庭が大半を占めていた。ここで、都市部では共働きで多様な職業の幅があるのに比べ、農村部では主に農業であり、選択肢の幅が狭いのに加え女性は働かない家庭も多いという違いが見えてくる。しかし、それぞれの地域の中学生の「将来の夢」

を比較すると、都市部は会計士(2)、教員(2)、医者(1)、まだわからない(3)、近郊では、教師(4)、医者(2)、ツアーガイド(2)、仕立屋(1)、遠隔地では教員(8)、科学者(2)、ツアーガイド(2)、医者(1)、ホテルの経営者(1)、警察官(1)、調理師(1)、仕立屋(1)、アーティスト(1)と、子どもたちが身近な職業のみから将来の夢を選択しているわけではないこともわかる。子どもが職業を選択する際に影響する要因について、インタビューデータを基に検討する。

5.1 職業選択を左右する外的要因

5.1.1 親の意識による制約

カンボジアには目上に敬意を払う習慣があるが、「その行為は「一種の権力的」関係を作り出し子どもの行動を制限している」(サラーン, 2012, p.22)可能性がある。将来の道は子どもの選択に任せたいと回答する親は多くいたが、農村部の親の一部は進んでほしい道を子どもに伝えており、その多くは教員か医者を希望していた。この理由として収入が多いことに言及し、「先生か医者になって親をサポートしてほしい」と経済的支援を求める親や「教育を受ければよい仕事につける」と答える親が多数見られた。

「カンボジア農村には差別的な目」があり、「学歴は女子よりも男子が取得するものである」(サラーン, 2012, p.32)という意識は本調査の対象となった保護者の回答には見られず、ほとんどの家庭で男女の区別なくどちらにも教育は大切だとの意識を持っていた。しかし、「長女は勉強をやめて家を手伝ってほしい。」と答えた保護者も遠隔地に1名おり、農村部の多くの家庭で母親が専業主婦か家政婦であったことも踏まえると、遠隔地では子どもの職業選択において息子と娘に別の期待を抱く親もいると考えられる。

5.1.2 経済的な厳しさによる制約

子どもに大学進学や教師、研究者になることを望みながら経済的に厳しいと答える保護者が都市部(1)近郊(2)いたが、遠隔地では「12年生まで」「高校までは自転車が必要だが貧しくて買ってあげられないので9年生まで」など都市や近郊と比較して、より経済的に厳しい現状を訴える親の割合が大きかった。

また、都市部内での経済格差も大きい。ある保護者は、修士号を取得した学校長を夫にもつ主婦で、4人の子ども全員に当然のように修士まで修了することを望んでいた。インタビューの際も高級ブランドに身を包んでいるなど、明らかに他の保護者と比較して経済的なゆとりが垣間見え、地域内での経済格差が顕著に現れていた。その一方で都市部でも、保護者が子どもに大学進学を希望しているものの義務教育の途中から働いている生徒の事例が見られた。本調査からも明らかになったように正規授業外教育(補習)への出費は大きく、「学年が上がるほどその負担が大きくなっている」(正楽, 2008, p.208)ため、経済的な理由で進学を諦めざるを得ない生徒がいることも事実である。

5.1.3 環境要因による制約

環境の制約として挙げられるのは、高校・大学が都市部に集中しているということである。シエムリアップには国立大学が1つもなく(小口, 2013)、また前述の「高校は遠いから自転車が必要だが貧しくて買ってあげられないので9年生まで」という語りからは、農村部の高校の少なさが窺える。それに対し都市部ではこうした距離の問題への言及は見られなかった。さらに結婚写真館を営む保護者は、職業訓練校に通ったと答えており、そのような「職業訓練校」と

いう選択肢もある環境にあったことがわかった。

5.2 生徒の将来の夢と地域性

前項では、親の職業や外的要因が与える生徒の将来の夢への影響を検討したが、本項では将来の夢の理由や希望する教育レベルに関する回答と、地域による教育機会の違いと生徒の希望の関連を考察する。

5.2.1 職業選択の背景

生徒の将来の夢は地域によって違いがみられたが、発達段階による大きな違いというものは見受けられなかった。都市部の学校に通う生徒の将来の夢は多岐に渡るのに対し、遠隔地ではかなり偏りがみられた。異なる点はいくつかあったが、共通点も存在することが明らかになった。すべての地域で医者や看護師など医療関係の仕事、ツアーガイド、教員を志望する生徒がいた。

ツアーガイドの職業選択は今回インタビューを行ったシエムリアップ州の特徴が色濃く出ているものだといえる。観光産業にかかわる世界各国の企業からなる World Travel & Tourism Council (2015)によると観光産業はカンボジアの2014年のGDPの29.9%をしめる。ツアーガイドという観光産業に大きな役割を果たす職業は「安定した良い職」として人気が高いことがわかる。

他には、医療関係の仕事に就きたいと回答する生徒も全地域にいた。全員が医療関係は高給で人を助けることができるうえに興味深い職種だと話していた。しかし、近郊と遠隔地では無医村のため、自分たちが医者になるという意思の生徒もいた。彼らの発言からシエムリアップ州における医療へのアクセス格差が窺える。

教員になりたいと回答した生徒たちは、住んでいる地域に関わらず全員が以下の理由を述べていた：尊敬する先生がいた、勉強が好きだった、次世代の育成に関わりたいから。しかし、教員を志望する人数には地域によって大きな差が見られた。都市からの距離が遠いほど、教員志望の生徒が多い結果が得られた。近郊と遠隔地では半分以上の生徒が教員を将来の夢と答えたのに対して、都市では1人であった。

5.2.2 希望する教育レベル

希望する教育レベルに関しては、地域によって大きな違いがみられた。まず都市の中学校では、全員が大学進学希望、または「勉強しつくすまで」進学したいと答えていた。また小学校でも、生徒の半分は大学へ進学する意思があり、他は9年生や12年生までと答えていた。しかしこれは回答した生徒の兄姉がそこまで卒業できず良い仕事に就けなかったことの反省から、親が「せめてここまで行ってほしい」という思いを伝えているために「中学校、または高校の卒業まで」と回答していたケースである。親のインタビュー結果では、なるべく上まで行ってほしいし、行くなら経済的援助を行うと答えた人が多かった。進学の規定要因は勉強に対する「希望」や「望み」というものが見受けられた。

一方で農村部では、都市と比較して低い教育レベルを回答する傾向が高かった。これらの地域では7年生から12年生までの卒業レベルを望む生徒が多く、大学進学を希望する者も数名いたが、経済的に家族に負担がかかるため無理だろうと回答していた。さらに保護者は経済的理由から生徒よりもさらに低い教育レベルを希望していた。ここでは、勉強を続ける能力があるのにも関わらず、「絶望」や「諦め」という理由

から進学レベルを決めていることが分かった。

都市部では、生徒は大学を卒業するのが一般的であり、それについて疑問を持っていないように見受けられた。他の2つの地域では全く異なり、本人に進学する能力があると分かっているながら家族の経済的負担を考え諦めているケースがみられた。これらの地域では高い教育水準を保ちながらも夢を捨てる生徒たちの苦悩が深刻になっている。

5.3 例外的な生徒の事例

本節では農村部で行ったインタビューの中で他の生徒とは異なる回答を得られた2名の事例を紹介する。1例目のスレイニアさん（仮名）は遠隔地の小学校に通っており、新聞記者になりたいと思っている6年生の女子生徒である。2例目のパンさん（仮名）は遠隔地の中学校に通っている9年生の男子生徒で、家計の収入がない状態でNGOや学校の支援により教育を受けている。スレイニアさんは将来の夢が、パンさんは家庭状況が他の農村部の生徒に比べて特殊であり、インタビューから農村部における将来観の基本像に当てはまらない姿を明らかにしたい。

1例目のスレイニアさんの将来の夢は新聞記者であり、回答を得られた他の農村部の5、6年生の多くが先生を希望する中で(8人中6人、他1人は未定)、特徴的な回答だといえる。彼女は自身が教育を受け新聞記者になることで、十分な情報を得られていない地域の人々に情報を地域に届けたいと考えている。彼女自身はおじの家で新聞を読む機会があり、多くの生徒が身近な存在である先生になることを望む中で、普段接することがない新聞記者にあこがれを抱くようになった。しかし、人と違う夢を語る彼女

の学校での姿が他の生徒と大きく違うわけではない。6年生のクラスでは上位（4番目）の成績だが1年生時に留年を経験しており、特別な補習授業も受けていない。小学生の段階で自分の身近に存在しない職業を志望することは難しい。スレイニアさんにはおじの家で新聞を読むことができる幸運があった。しかしこの事例は、情報や身近な職業の選択肢が限られている農村部でも少しのきっかけが生徒の多様な将来観に反映されていく可能性を示した一例だといえる。

パンさんは農村部の学校に通う男子中学生である。家族構成について質問した際に、両親が離婚したため父親とは別居していること、母親は主婦をしていて家計を支える収入がないことを話してくれた。本来なら彼は経済的な理由によって学校に通えないはずだったが、学校の配慮により特別に同級生と一緒に授業を受けているとのことだった。また、有料の補習が受けられないことについて、先生に直接相談した結果、特別に無料で受講する許可が得られた。中学校の他にも2つの団体が運営する教育支援を受けている。将来の夢はツアーガイドであり、その職に就くためには英語を話せることが必要である。彼自身英語を勉強することが好きで、満点を取ることがあるという。中途退学のリスクが高かったパンさんがツアーガイドという将来の夢をもち続けていられること、学校で友達と遊ぶことや本を読むことから楽しさを見出せていることは、農村部で一概に教育達成の可能性が限られているわけではなく困難な状況でも学校や教員等周囲のサポートにより将来に希望を持ち続けられることを示している。

5.4 教員による生徒への将来観

本節では、生徒や親の将来観に対して教員の

期待や教育機会や教育環境がどのように影響しているか検討する。生徒や親の将来観には地域差が存在しているが、教員から生徒への期待には地域ごとの大きな違いは見られず、小学校と中学校の生徒の発達段階の違いにより、期待の内容が異なる傾向が見られた。

5.4.1 教員から生徒への期待

小学校教員においては、どの地域でも共通していたのは、「自分の夢を実現してほしい」という期待である。都市部以外では、「良い人材となしてほしい。良いモラルと高い知識をもってほしい（50代男性教員：近郊）」「将来良い給料を得るためのスキルを身に付け、自立してほしい（30代男性教員：遠隔地）」という意見もあり、所得格差や居住環境から、より具体的な期待が現れると考えられる。

一方、中学校教員の間では、人格形成や、職業、人材育成の視点がより明確に見られ、「良い人格を持った人間になってほしい。知識を応用する職について、国の発展に貢献してほしい（40代男性教員：都市部）」「高所得の仕事、たとえばエンジニア、医者、ホテルマンといった職業に就いてほしい（20代女性教員・近郊）」「肉体力労働ではなく、知識をつけて良い仕事に就いてほしい、国内に残って国の発展に貢献してほしい（20代女性教員・遠隔地）」との意見が得られた。

また、都市部と近郊では「良い職業」とはサービス業・専門職を指し、遠隔地では主に教員が念頭に置かれていた。これは地域差による職業選択の幅の違いの現れであり、遠隔地では将来の夢を挙げる生徒が多かった傾向と一致する。

5. 4. 2 地域による課題の違いと校長・教員の姿勢

生徒や保護者の将来観や希望する教育レベルは、現在の教育環境や教員の質、教育内容の質とも関係すると考えられる。本項ではそれらの地域ごとの特徴を考察する。

先行研究においては、都市部と比較して、近郊および遠隔地の教育状況が深刻であることや、有資格教員の不足が近郊および遠隔地でより深刻であることが指摘されている（正楽，2008）。今回の調査ではランダムに抽出した近郊および遠隔地の教員8人と校長2人は全員の有資格者であった。サンプルとしては圧倒的に数が不足しているものの、近年の近郊・遠隔地教員の有資格者が増加しているという仮説をたてることは可能である。

また教育状況についても、今回のインタビューから、遠隔地の貧困地域だからこそ教育機会を積極的に提供しようとする学校があることが明らかになった。近郊や遠隔地は学校環境の「校門すらなく、砂や牛が入ってくる（40代男性中学校校長・遠隔地）」など施設の不備や教材不足を改善する経済的余裕がなく、教員が不足し、地域からの財政援助もない厳しい状況にある。しかしこうした状況下でも、教員の工夫による学習機会の提供が積極的になされている。遠隔地の中学の校長は、教員数の不足のためスポーツや農業の授業も担当し、生徒の状況を細やかに把握していた。それが端的に表れていたのが就学前教育の効果への認識である。小学校では教員・校長とも全員が就学前教育有無からくる生徒の学習能力や社会性の違いを認識しており、対策をとっていたが、中学校教員は、大半が生徒の違いへの認識がなかった。一方で前述の遠隔地の校長は違いを認識しており、就学前教育

未就学者が苦手な授業の補習を教員に指示していた。また、この校長は補習授業の無償提供も奨励しており、インタビューをした教員2人は、無償で補習を行っていた。補習なしでは授業についていくのが難しいという生徒もおり（Edwards, Jr. et al., 2014）、特に「カリキュラム内容に生徒の能力が追いついていない（20代女性教員・遠隔地）」学校では、こうした学習支援が生徒の就学継続の契機となる可能性がある。農村地域の教育の質の保障の向上という政策課題に積極的に取り組む必要があるのは必須だが、農村地域の貧困層の生徒にも、教育や将来への希望へとつながる状況がある。

都市部では、「将来の夢がまだわからない」生徒がおり、これは近郊や遠隔地にはない傾向であったが、インタビューから、都市部では先進国に共通するような課題が浮かび上がってきた。都市部の中学では、校長に変わり副校長が校長職を代行していたが、モチベーションの低下について語っていた。業務内容は、学内での月一度の教員会議、月に3～5人の教員の授業観察と助言、保護者を含んだ地域コミュニティとの年に2回の会議を主催、学力の低い生徒や態度が悪い生徒の親との面談、さらには学校運営財源のドナー探しなどで消耗していた。教育実習では生徒との関わりが楽しくやりがいを感じたが、今はそういった生徒との関わりがなくなっている。仕事内容が多岐に渡り、長時間労働に見合わない社会的地位や教育省への不信感がモチベーション低下の理由である（40代男性校長・都市部）。教員からは「最近の生徒はスマホ・テレビ・ゲームに費やす時間が増え学ぶ意欲に乏しく、親も生徒の学習の動機づけをしない（40代男性教員・都市部）」ということが語られており、厳しい労働環境と生活環境の変化が副校長と生

徒のモチベーション低下につながっていることが考えられる。

施設や教材については近郊や遠隔地よりは建物や教材購入の財源が確保されているものの「必要な教材をカンボジア国内で入手できない」といった別な問題に直面していた。

都市部では近郊や遠隔地よりも地域内の所得格差が大きいことが想定され、高所得者もしくは低所得者の子どもの学習動機や社会の変化に伴う生徒の変化にとまどう教員の姿勢が、生徒の将来観にも影響を及ぼすことも仮説として考えられる。

6. まとめ

本稿では、生徒の進学希望や職業への期待といった将来観について、カンボジアの都市部と、近郊、遠隔地(農村部)の地域間の共通点と相違点を明らかにすることを目的に「生徒の家事労働と遅刻・欠席理由との関係」、「補習授業の特徴」、「生徒・保護者・教員の将来観」の3点に着目して、インタビュー調査結果を分析した。

第一に「生徒の家事労働と遅刻・欠席理由との関係」については、生徒の家庭役割が都市部と農村部で異なっていることがわかった。農村部では生徒が担う家事労働の比重が高く、遅刻・欠席の理由が家事労働に時間を割かれているためとの回答が多数得られた。一方の都市部では、生徒が家事労働を担う頻度も時間も少なく、それが遅刻・欠席を規定する要因とはなっていないことが明らかになった。

第二に「補習授業の特徴」については、サンプル数の制約から地域ごとの相違点を分析するには至らなかったが、小学校と中学校のそれぞれの特徴を析出することができた。小学校では成績上位者の受講率が高いが、中学校ではあら

ゆる成績レベルの生徒が受講していた。また科目については、小学校では主に英語、算数、国語(クメール語)の3科目であったが、中学校ではこれらに物理や化学なども加わり、理数科系の補習を受講している生徒が多く見られ、受講科目の選択は生徒の苦手科目と関連があることも明らかになった。

第三に「生徒・保護者・教員の将来観」については、生徒と保護者のインタビューデータから職業選択と希望する教育レベルの2つの視点から考察し、都市部と比較して農村部の生徒には将来観を狭める様々な要因があることがわかった。具体的には、親の期待、家庭の経済状況、高等教育機関へのアクセス困難といった外部環境が生徒の将来観に影響を与えていた。また、教員からは、どの地域の小学校でも「夢を実現させてほしい」と期待する声が聞かれ、中学校では「人格形成」「人材育成」を視野に入れた回答が得られた。職業の種別については、都市部と近郊の教員は「良い職業」にサービス業を挙げる一方で遠隔地の教員は「教員」を念頭に回答する傾向が見られ、生徒の職業選択に一定の影響を与えている可能性が示唆された。最後に、都市部と比較して教育面で課題の多い農村部においても、学校や教員等周囲のサポートを得て、明確な将来像を描きながら高い学習意欲をもつ生徒の事例を挙げた。教員の姿勢やモチベーションが生徒の学習支援につながっていることや、身近な保護者や親戚による学習を促す態度が、生徒の将来観に影響を与えていることが明らかになった。

本研究は、インタビュー調査のサンプル数や対象の選択方法ならびに質問項目に関して課題が残されている。今後さらなる調査をもって、カンボジアの教育の質的向上に資する研究を行

う必要があることを指摘し、本稿の結びとした
い。

引用文献

Brehm, W.C. & Silova, I. (2014). Hidden

privatization of public education in Cambodia:

Equity implications of private tutoring. *Journal of Educational Research Online*, 6(1), 94-116.

江田英里香 (2006)「コミュニティの初等学校参加の現状と課題—カンボジアのカンダル州チュエッティエル区を事例に—」『八洲学園大学起要』第2号, 11-23.

Edwards Jr, D. B., Zimmermann, T., Sitha, C., Williams, J. H., & Kitamura, Y. (2014). Student transition from primary to lower secondary school in Cambodia: Narrative insights into complex systems. *Prospects*, 44(3), 367-380.

平山雄大(2008)「カンボジアにおける学校教育の諸段階—各教育段階の量(アクセス)の拡大に着目して—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』第16巻第1号, 207-217.

平山雄大(2011)「カンボジアにおける初等教員養成—初等教員養成機関(州教員養成校)の現状に着目して—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』第18号-2, 167-177.

IDP Education-English Language Schools

[<https://www.idp.com/cambodia/ace/>](Accessed on May 1, 2016).

Ministry of Education, Youth and Sport (2015).

Education Statistics and Indicators 2014-2015.

National Institute of Statistic, Ministry of Planning (2015). *Cambodia Socio-Economic Survey 2014*.

野村美知子 (2004)「カンボジアにおける幼児教育の現状と課題 —JICA シニア海外ボランティアとしての活動から— (お茶の水女子大学

子ども発達教育研究センター国際教育協力セミナー)」

[http://www.ocha.ac.jp/intl/cwed_old/eccd/symposium_seminer/seminer2004/nomura040717.pdf]

(accessed on May 1, 2016) .

小口瑛子(2012)「農業から転換しつつある社会における「上昇志向」の発達：カンボジア・シエムリアップ州都近郊農村における大学進学

Pit, C. and Ford, D. (2004) “Cambodian higher education: mixed visions,” in Altbach, Philip G and Toru Umakoshi (eds.), *Asian Universities: Historical Perspectives and Contemporary Challenges*, Baltimore, Md.: Johns Hopkins University Press, 333-362. (羽谷沙織 (訳)

(2006)「カンボジアの高等教育—交錯する展望」北村友人(監訳)『高等教育シリーズ137 アジアの高等教育』玉川大学出版部, 364-400)

Shaeffer, Sheldon. (ed.). (1994). *Partnerships and Participation in Basic Education: A Series of Training Modules and Case Study Abstracts for Educational Planners and Managers*. Paris: UNESCO, International Institute for Educational Planning.

清水由紀・外山紀子・松井由佳 (2007)「カンボジアにおける幼児教育(科学研究費補助金 研究成果報告書)」

[http://www.ocha.ac.jp/intl/cwed_old/eccd/site1_p3_cambodia.pdf](accessed on May 1, 2016) .

正楽藍 (2008)「カンボジアにおける教育発展：基礎教育の充実と学校をめぐる諸課題」『国際協力論集』第16巻第1号, 199-215.

チューブ, サラーン(2012)「カンボジア農村における非富裕層女子の中途退学に関する考

察: 工場労働者のインタビュー調査をもと
に」『教育學雜誌』第 47 号、17-33.

Copyright © 2010-2017 Center for Advanced School Education and Evidence-based Research
Graduate School of Education, The University of Tokyo

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター
Center for Advanced School Education and Evidence-based Research,
Graduate School of Education, The University of Tokyo
WEBSITE (日本語) : <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/>
WEBSITE (English) : <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/en/>